

1. 焼き物の里から古の城下町へ

馬見山（977.8m）を最高峰に屏山（926.6m）、古処山（859.5m）と続くこの山域は、筑後地方と筑豊地方の境界をなし、特に南側の筑後平野から眺めるとその稜線がはっきりと見て取れる。北側流域は遠賀川の源流となり玄界灘へ注ぎ、南側は筑後川となり有明海へと注ぐ。山域の南側には江川ダム、寺内ダムなど大規模なダムがあり筑後地方はもとより福岡市にも供給され県民の水源としての機能も持つ。現在、江川ダムの上流に小石原川ダムの建設も進んでいる。登山口に当たる小石原は、現在50もの窯元を数える焼き物の里として全国的に有名である。素朴な暖かみを持つ日用雑器でありながら美しさを兼ね備えた小石原焼きは多くのファンを持ち、春と秋に開催される‘民陶村祭り’は大勢の観光客で賑わいを見せる。平成17年に旧宝珠山村と合併し現在は東峰村となっている。

古処山は全山が石灰岩で出来ており、山頂付近の一帯にはツゲの原始林が残り特別天然記念物に指定されている。鎌倉時代から戦国時代末期にかけてこの辺り一帯を治めた秋月氏の居城、古処山城はこの山にあり頂上付近にその跡が残っている。ゴールの秋月は古処山の麓にひっそりと佇む城下町で、年間約30万人もの人が訪れる観光地となっている。全国で唯一、城下町全体が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、「秋月千軒」と称されるにぎわいを誇った往時の面影を今に伝えている。

2. 大会コースのルートガイド **太字下線**は主要地点

縦走路の大部分は九州自然歩道として整備され、案内看板も多く全体を通じ歩き易いコースである。幕营地である小石原グラウンド横の車道も九州自然歩道である。ただ、はじめの2kmほどは車道歩きとなる。案内板にしたがって進むと国道211号線に出る。150mほど北に向かうと、信号機のある小石原交差点がある。ここを左に曲がり、嘉麻峠の方に向かう。九州自然歩道とはいえ、一般国道である。車に気を付けて歩こう。

嘉麻峠の少し南側にある旧民芸村（現在は売却されている）の国道をはさんだ向かい側に九州自然歩道の看板を目印として登山道への入り口（自然歩道入口）がある。馬見山まで6kmの表示。ここから3.5kmほどは林道と何度も出会うが、ほとんどは横切ることになり、10m以上歩くことはないのその点に気を付けて歩けば、九州自然歩道として整備された道なので迷うことはないだろう。なお、この入り口からの距離（看板）をもとに以下に少し詳しく説明したい。また、右側がスギやヒノキの植林、左側が雑木林の境目を歩くことが多く、これが屏山まで続く。ただ、入り口付近のように右も左も植林地帯であっ



小石原グラウンド横の道にある看板



登山道への入り口（自然歩道入口）

たり、馬見山山頂付近のように周りすべてが雑木林であつたりすることもあるので、その点には注意したい。

登り始めてすぐは伐採された跡に再度植林しているが、シカの食害を防ぐため1本1本にカバーしてある。また、一面ススキが生えて登山道がわかりづらい。やはりシカよけのために張られたネットを左に見ながら進んでいくと樹林帯となり短い急坂が繰り返す。0.5 kmほど行ったところで林道に出会い、ほんの数m先を左側の尾根に入る。1.3 kmほど行くと、もともとはピークを越えていたところで、左側に「馬見山」のラミネートされた標識を見る。どちらを行ってもすぐにまた1本の道になる。合流した後も下っていき、1.5 kmのところまで林道と出会う。この林道は横切って再び林の中へ入る。ここから先はしばらく九州自然歩道の右手を林道が平行して進むようになる。1.7 kmほど行くとまた林道を横切る。尾根を登っていき、2 kmほどでまた林道を横切る。ここから200 mほどはすぐ左に林道が見えるが、そこは歩かない。2.7 km行ったところで右へほぼ直角に曲がる。通称「大曲」と呼ばれる場所である。しばらく行くと、あと2回林道を横切る。最後の林道を横切るのが自然歩道入口から3.4 kmほど。距離による詳しい説明はここまでにしたい。

さらに進んでいくと、ほとんど樹林帯の中だったのが、左側の樹林がなくなりススキの原っぱを足元のスギゴケを踏みながら歩く地点が出てくる。ここから小石原川ダムの建設の様子が見える。急な登りに差し掛かったところで左手に栗河内への案内看板が確認できる。現在、前述の小石原川ダムの建設工事に伴い栗河内方面へのコースは全て通行禁止となっている。さらに進み大きな尾根筋を登っていくと、左手（南側）が開けたところにベンチと馬見山山頂の標識がある場所に出る。ここは「見晴し台」と名付けられ、南側の展望が利き好天のときは筑後平野が見渡せる絶好の休息ポイントとなる。また、このすぐ北側に避難小屋ができていて、心強い。本当の**馬見山山頂**はさらに雑木を抜け30 mほど進んだ所にあり、三角点の標識と山頂の看板がある。ここからは縦走路北側の馬見山キャンプ場方面へのコースが分岐している。山頂はそれほど広くないが、こちらは北側の展望が開けている。

馬見山頂からは宇土浦越への下りとなる。この辺りはアブラチャンの林が美しいところである。また、ブナも比較的豊富にある。途中傾斜の急なところもあるので慎重に下る。鞍部と小ピークを二度ほど越え、もう少しで宇土浦越というところに四等三角点がある。確かにここからは、これから行こうとする江川岳や屏山



シカ対策のカバー
向こうに見えるススキの中へ入る



大曲



馬見山避難小屋



馬見山山頂

を望むことができる。やがて大きな案内看板のある宇土浦越に到着し、ここには北側の馬見林道方面と南側の鮎尾への分岐があり十字路をなしている。鮎尾から宇土浦越直下まで林道があるが、荒れていて車での通行は困難である。

宇土浦越しから再び登りとなりそれほど長くはないが急な登りが繰り返し現れ、疲労の蓄積した足にはこたえる。さらに目前に急な登りが見えたところで、本来の自然歩道と、右の植林帯へと入る巻き道の分岐点に達する。ここは頑張って本来の道を登っていくと、平成30年に名前の決まった江川岳（標高861m）に到達する。これまでは通称‘ニセ屏’と呼ばれていたが、やはりちゃんとした名前があると登る気になるものである。ただ、樹林帯に囲まれ展望は利かない。



分岐点

登ったら下らなくてはならないが、古くなった木の階段を下っていくと、巻き道と再び合流し、再び登り始める。はじめに記述した通りこの辺りも基本的に右側が植林、左側が雑木林だが、雑木の種類としては、アカガシ、ヤブツバキ、ウリハダカエデなどが見受けられる。だんだんと登りの傾斜がきつくなり、最後は階段状になった急登を息を切らしながら登り詰めたところが屏山山頂である。案内看板が設置してあり、北側（筑豊側）の展望が利き気持ちが良い。

ここから古処山まではアップダウンも少なく、気持ちの良い縦走を楽しむことができる。途中大岩の脇を通り、左手に天然記念物ツゲ原始林への分岐がある。案内看板がなくなって、少しわかりづらくなっている。この分岐点を過ぎると、コケむす石灰岩の登りとなる。雨が降った後など石灰岩は滑り易いので注意が必要である。ただ、周りはツゲの原生林で気持ちがいい。岩の間を体をひねりながら進み少しずつ展望が開けてきたら岩場の間に古処山山頂の標識がある広場へと出る。ここには祠が奉られており山岳宗教の名残が感じられる。



ツゲ原始林への分岐（黄色の矢印）
大会コースは赤い矢印

山頂からは秋月方面へ下るコースが九州自然歩道となっているが、今回はここで九州自然歩道と別れ、国道322号線の八丁峠方面へ向かう。山頂から案内に沿って進むと、‘馬攻め場’と呼ばれる広場を通る。ここは山城跡と言われている場所である。右手に古処山キャンプ場への分岐（遊人の杜分岐）を見て、尾根筋に広い道をしばらく行くと林道と出会う。300mほど進んだところで林道分岐となっているが、どちらへ進んでも国道へ出る。右へ進むと林道がそのまま続き、八丁峠から500mほど下ったあたりへ出る。左へ行くと林道は歩道となり、先ほどのところよりさらに数百m秋月側へ下ったところで国道と出会う。さらに国道を10分ほど下ったところに旧秋月街道の看板があり、石畳の旧道が秋月登山口まで続いている。

※ 平成27年度全九州高等学校体育大会 第58回全九州高等学校登山競技大会予報第1号をもとに、平成30年10月に現地調査の上、加筆修正。